

## カンタベリー大主教 2012 年クリスマス説教



第 104 代カンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師父は 2012 年末をもって大主教の座を退かれ、ケンブリッジ大学マグダレーン・カレッジの学長に就任されます。ここに翻訳したのは、カンタベリー大主教としての最後のクリスマス説教です。

数週間前に発表された世論調査によると、英国人の59%が自分はクリスチャンであると答えたということです。これは10年前と比べて12%のダウンです。幾つかの世俗主義の団体からは喜びの声があがりました。しかし、もし自分が英国人間主義協会の会員であったとしたら、興奮する前にちょっと考えることでしょうか。市民の四分の三は何らかの宗教的信仰を持っているという事実があるのです。そして、世論調査は、自らを宗教的でないとする人たちが宗教についてどう考えているかを明らかにしていませんし、おそらくすることはできないでしょう。考えたこともないということなのか。何かを信じることができたかと願っているのか。宗教を問題だと思っているのか、社会の富であると思っているのか。先月の（英国教会）総会の後の深刻な痛みの経験の中で驚かされたのは、世論調査に「はい（宗教をもっています）」とは決して答えないであろう人々のとても多くが、教会にある種の投資をしていることが明るみに出たことです。彼らは教会を信頼性あるものとして見たいと願っているのです。そして、教会が、彼らの目から見て、その為すべきことを為さないと、本当に喪失感を味わうのです。

信仰は社会を動かさなくなっていると世論調査から結論づけるには、まだ多くのことが問われなければなりません。しかし、数字がもっと悪かったとしたらどうでしょうか。これから数年の間に、もっと悪くならどうでしょうか。宗教的な信仰一般、ことにキリスト教信仰の時代はもう終わり、あきらめなければならないということなのではないでしょうか。答えは、「いいえ」でなければなりません。「信仰をきちんと伝えられなかったと思うかもしれない。信仰の弱まりによって生じる国民生活と公共の働きにおける甚大な損失を残念に思うかもしれない。しかし、信仰がにわかにならなくなったとか、信頼性を失ったなどと結論することはできない」と答えなければなりません。

信仰は、世論が決めることに関わるものではありません。信仰は、わたしたちが自分についてどう思うかに関わるものではありません。それは、自らを現実として呈示してくるものに対して人々が為す応答であります。信仰

とは、あなたに対して要求するところのある現実として立ち現れるものへの応答であります。わたしたちの前には、わたしたちの世界を中断させるもの、燃える柴の木の物語におけるモーセのように、あなたを立ち止まらせ、「道をそれて見届け」に行かせるものが存在しています。信仰は、立ち止まったその時に始まるものです。それまでのように歩き続けることができなくなった時に始まるもの、と言ってもよいでしょう。もっと挑戦的な言い方をすると、信仰とは変化と喪失を要求する何かである、と言えるでしょう。そうであるならば、すべての考え、習慣、希望は変わることにになります。その変化は痛みを伴うものでしょう。英語で書かれたもっとも印象深いクリスマスの詩『賢人たちの旅』において、T.S. エリオットはベツレヘムへの旅を終えて家に着いた賢人たちについて想像しています。賢人たちは、「もはや古い在り方の中では落ち着くことができず」、自分たちが見たのは誕生だったのか死だったのかと思い巡らすのです。

…私は誕生と死を見た。しかし思った。それらは違っていたと。この＜誕生＞は我々にとって＜死＞のようだ、我々の死のように＜過酷＞だ、と。

しかし、賢人たちは、自分たちが見たことを否定できません。彼らは実際に旅をして、その価値はあったと確信させられる何かを実際に見たのでした。信仰とは、要求であり、衝撃であり、死であり、命なのです。

「満たされた、と言っていいだろう」とエリオットの賢人たちは言います。エリオットが得意とする控えめな表現で。賢人たちは探していたものを見つけました。それは自分たちが探していると思っていたものとは全く違っていました。キリスト教の福音は、ふたつの等しく必要な真理を確固として宣言します。イエスは世界の民の希望です。イエスは全人類が目にしたいと切に願っている方、その方が共にいてくださるとすべての傷と嘆きが癒される、その人です。そしてまた、イエスは全く予期されない方、あまりに見慣れないので、迎えることを期待されていた人間にはこの方であると分からない人

です。イエスが世を創った、と聖ヨハネは言います。そして、イエスは歴史の中で語られました。しかし、世にはイエスの居場所はなく、啓示と宗教的清浄さの専門家たちは反感を持ってイエスに背を向けました。宗教の専門家や神殿の聖職者たちこそがイエスを敵と見たのだということを思い起こすことなく、新約聖書を開いてはなりません。彼らは、立ち止まって見るための妨げを、望まないのです。

神の真理とは、わたしたちが想像できる限り最も慰めと喜びに満ちたものです。そしてまた、最も混乱させる、要求の厳しいものでもあります。旧約聖書に、古代イスラエルの恐るべき敵であった偉大な将軍が預言者エリシャのところに重い皮膚病を治してもらおうとやってくる有名な物語があります（列王記下 5 章）。預言者は彼に、川で洗うようにとだけ告げます。将軍は憤ります。もっと為し遂げるのが困難で、華やかで、英雄的なことがあるはずだと。違うのです。全く単純なることを為せと言うのです。行って洗いなさい。一日の長い仕事を終えて川で体を流しているつつましかな人々、石に洗濯物を叩きつけている人々に加わりなさい。行って、世の人々に加わり、自分が何者であるかを認めなさい。それこそが真の英雄的行為であり、最も困難なことです。

これは、悔い改め、信じなさい、そして洗礼を受けなさい、という新約聖書の招きの予告です。向きを変えて、これまで一度も見えていなかったところを見なさい、あなたを呼んでいる者を信じ、彼の溢れる憐れみの水の下に身を沈めなさい、という招きの予告です。彼と共に在りなさい、愛し合い、喜び合い、仕え合う霊において再創造された新しい人類に加わりなさい、という招きの予告です。

イエスのことが変わっていて脅威的だと感じられるならば、それは私たちが本物の人間性からいかに遠く離れてしまったか、自分たちの弱さや限界についての本物の正直さからいかに遠く離れてしまったかということの、する

してはいませんか（新約聖書が確かにそう示しているように）。

「私は偉大なる太陽である。しかし、あなたは私を見ることはない。」これはチャールズ・コースレーによる、ある素晴らしい詩の始まりの一節です。私たちは、それが宗教的とされていることであれ何であれ、私たち自身がやっていることにあまりにも魅惑されてしまっているので、それから目をそらし、じっと愛の神秘を見つめることは「難しくて、ひどくつらいこと」であることに気づかされます。私たちは宗教というと、おそらく、それを、私たちが持つ諸々の問いに対する整った答えのセット、典礼、道徳上の振る舞いのシステム、もしくは、ある種の問題に興味を持つ人たちのためにある「普通の」人生に付け加えることのできるもの、と考えているのです。しかし、イエスは、ただ私たちが大切と考える問題に答えるために来られるのではありません（全福音書、ことにヨハネによる福音書の特徴のひとつは、イエスはしばしば尋ねられた質問に答えることを拒否し、問いかけることによって応えていることです）。イエスは神を幸せにしておくためのテクニックを与えに来られるのではありません。推論好きな人たちのための無害で奇抜な趣味を創造するために来るのでもありません。イエスは人間性そのものを新たにするために来られるのです。神との関係、人間同士の関係において平和であることができるような、新たな可能性を創り出すために来られるのです。イエスは、私たちを召し集め、共におらせることによって、それを為します。

このことが世論調査ですぐに人気を集めなかったとしても、全く驚きではないでしょう。自らをクリスチャンと称することに戸惑いがあるとしたら、それは、軽々しく取られるべきでないキリスト教信仰が要求するものの自分の世界との違いや厳しさを、曖昧にであれ認識しているということだとも考えられるでしょう。また逆に、多くの人がまだ自らをクリスチャンの名で呼びたいのであれば、それは、何はともあれ、この人、イエス・キリストの生と死、そして復活という神秘的な出来事を深く見るために道をそれ、その言葉に耳を傾けつつ、共にいるところが私たちのいるべきところ、いるのが自然と

ころという認識があるということでしょう。ひとつ確かであることは、信仰が真であるか偽であるかは人数獲得の成功に依らないということです。時にはそうであるように思われる時もありますが、そうであるとはいえない時もあるのです。私たちは、できるかぎり懸命に、想像力を豊かに働かせながら、信仰を分かち合おうとするべきですし、それは可能なことです。しかし、望むようにすぐに根を下ろさないからといって気落ちしてはなりません。結局のところ、私たちのやろうとしていることは、とんでもないことなのです。人々に立ち止まって、向きを変え、私たち自身がしばしばぼんやりとしか輪郭を見ていない人のことを見て、その人と共にいることを学んでくれと頼むのですから。

しかし、イエスと共にいることが実際に何を意味するかを示す人生が生きられる時、イエスの輪郭はもっと明瞭になり、なぜそのような人生が「正常」に見えるのか、物事の在り方への自然な応答であるように見えるのか、人々は理解し始めます。残酷な行為や暴力に対して、理解し、和解しようとする態度、努力して身につけたそのような態度をもって人が応答する時、こんなのは全てまやかしだと口にする気になる人はいないでしょう。ギャングの暴力によって子どもを失った両親、目の前で反キリスト教の暴徒に夫が殺されるのを見たインドの女性、姉妹のレイプと殺害という出来事を理解し、受け入れようと何年も葛藤してきた女性、聖地を荒廃させつづけている紛争と不正義のために家族を失ったという事実によって団結し、友となったイスラエル人とパレスチナ人。…私は大主教としてこの10年の間に実際にこうした人々とお会いしてきました。彼らは、自身の、あるいは他の人々の悪夢のような苦しみを軽く考えたり、理屈で片付けようなどとは片時もすることなく、人を赦し、関係を作り直そうと新しい人間性を探究し、それによって、私たちに見させます。私たちを、道からそらさせ、見るようにさせます。燃え尽きることなく燃える柴の木を見させるかのように。そして、イエスを見させるのです。私たち自身を正直に見、世界を異なる仕方で見ることのゆるす

光の中にしばらく留まるため、まず立ち止まって振り返りなさいとお求めになる方を。

それが核心です。私たち自身を正直に見、世界を異なる仕方で見ることが、それが信仰の始まるところです。教理の答え、儀式の規律、道徳の要求を超えて。これらには、これらの場所があります。イエスと共にいることに時間を取る人は、新しい命についての聖書の証言に照らして、これらの本質を理解するでしょう。しかし、すべては道をそれて見ることから始まるのです。これをあんまりだと思う人もいますでしょう。おそらくは多くの人がそう思うかもしれません。立ち去りたくなる人は多いでしょう。聖ヨハネはまさにこのことを第6章の終わりで描いています。イエスが話すのを聞いた人々は、その言葉を、あまりにひどい、不快すぎる、厳しすぎる、変だと言います。しかし、もし自分の問いや優先順位、悩み、功績、失敗は、結局のところ、宇宙で最も重要なことではないと、私たちが自らの信念を手放すことができるならば、もし立ち止まり、道をそれる自由を知ることができるならば、世界自体が刷新され始めるのです。「来たりておがめ」とクリスマス・キャロルで言われます。その崇拜、飼い葉桶の中の子どもに注がれるその驚きのまなざしこそ、信仰の生まれるところです。そして、信仰の生まれるところに、イエスとその霊の新しい世界が生まれるのです。

(翻訳：執事パウロ眞野玄範)

※原文：‘join the human race this Christmas’

<http://www.archbishopofcanterbury.org/articles.php/2772/archbishops-christmas-sermon-join-the-human-race-this-christmas>

